



～見えにくさ以外の課題を併せ有する子どもへの対応～

乳幼児の教育相談を行っているとき、時々次のような問い合わせがあることがあります。

「見えにくさ以外の障害を併せ持っていますが、相談することはできますか？」

すでに他機関での療育を受けていても、見えにくさの部分については、他機関でのかかわりなどを確認しながら対応をさせていただくことがあります。

乳幼児教育相談は、保育所や幼稚園、障害児通園施設等とは異なり、本校に在籍をしているわけではないので、利用することができます。保育所に通いながら、月に1回程度本校の乳幼児相談を利用したり、地域の療育を受けながら、時々本校に相談に来られたりする方もいます。

そして、要望があれば、私たちの方から在籍されている保育所等に伺い、担任の先生方に対して子どもの見えにくさに対する助言を行うことがあります。また、子どもが本校に相談に来る日に合わせて、担当の保健師さんが同席されたり、保護者を通して取り組み内容を在籍先の先生方にお知らせしたりすることもあります。

★子どもはどんどん伸びていく

最初に相談に来ていた頃は、まだお母さんに抱っこされていたAちゃん。いつも不安そうな顔でお母さんにしがみつき、言葉もなかなか発してくれませんでした。お部屋に入っても、お母さんから離れようとせず、見慣れない遊びに誘うと泣いてしまうこともしばしばでした。

そんなAちゃんも、最初は目をこすりつけるようにおもちゃを見ていたときから、わずかながら目を離してみるようになり、それとともに周囲の様子もきょろきょろと見まわすことが増えました。まるで、お母さんの膝の上以外にも、何か面白そうなことがあるのかな、と興味がわいてきたようでした。

一般的に、子どもの視力は生後2か月で0.02ほどと言われており、そこから6～8歳まで発達していきます。やがてAちゃんはお母さんのひざを降り、部屋の中をよく歩くようになりました。私たちは、Aちゃんの見ようとする意欲が、以前よりもずいぶん伸びてきていることを確かに感じていました。それとあいまって、Aちゃんは自分が知りえた世界をもっとお母さんと共有したいと思うようになったのでしょうか。自分が見聞きしたものをお母さんに伝える言葉も増え、見え方も体も気持ちも言葉も、色々な力が一気に開花したように伸び始めました。

視力は6歳頃までに分かりやすい映像体験を積むことで伸びると言われています。そのため、見えにくさのある子どもには、見えやすくなる工夫をした経験を積極的に積んでいく支援が必要です。乳幼児教育相談では、おもちゃは色のコントラストをはっきりさせたり、凹凸部分が分かりやすい環境で遊べるようにしたりして、より分かりやすく安心して遊べるような機会を提供します。保護者もそういった工夫をご家庭でも取り入れやすいものから参考にさせていただいています。安心して過ごせたり、より楽しめる工夫ができたりすると、子どもはさらに意欲的に環境に自ら関わろうという気持ちを育てていくことができます。

